

知財業務を支える情報システムを、 新たなフェーズに！

情報システム委員会 委員長

小野 秀一 氏

(所属：日本たばこ産業株式会社)



interview

自己紹介

設計開発部門を経て知財部門に異動し、知財業務には約18年携わってきました。弁理士資格を有しています。当委員会には2024年度から参加し、2025年度は小委員長、2026年度より委員長を務めています。趣味は、自宅近くのジムでの筋力トレーニングや、年に数回の日帰り登山です。登山後に温泉に入ってゆっくり休む時間を楽しみにしています。在宅勤務が多いこともあり、日頃から健康維持を意識して体を動かすよう心がけています。

Q 研究テーマとそれらを選んだ背景・理由は？

2026年度の情報システム委員会では、3つの小委員会に分かれて活動しています。知財管理システム（IPMS）は、企業知財部の知財活動を支える基盤であり、予算策定、費用や工数の管理、戦略立案など、知財業務全体の質を左右します。近年は生成AIの進展により、IPMSそのものの役割や価値も大きく変わりつつあります。こうした環境変化を踏まえ、AIによるIPMSの革新を見据えつつ、実務との関係が深いテーマを設定しました。

第1小委員会では、知財管理システムのUI/UXに着目します。入力負荷や画面遷移の複雑さといった従来からの課題に加え、AI機能の活用を前提とした操作性や情報提示の在り方も視野に入れ、クラウド化や周辺ツール連携が進む中で、知財管理業務に適したUI/UXについて、設計観点や評価指標、改善アプローチを含めて調査・研究を行います。

第2小委員会では、BIツールを用いたデータ整備・分析をテーマとします。知財管理システム等に蓄積されたデータを可視化し、意思決定に活かす取り組みが進む一方、データ定義の不統一や運用体制などが課題となるケースも見られます。そこで、各社の活用状況や課題を整理し、知財部門で有用な分析ユースケースやKPI例、導入・運用の勘所について検討します。

第3小委員会では、生成AIの進展を踏まえた「AI時代の組織づくり」をテーマとしています。定型業務の自動化が進む将来を見据え、知財部門に求められる役割や人材スキル、品質・説明責任・セキュリティといった統制の在り方について整理します。近未来のユースケースを想定した検討を通じて、移行期における実務上の論点やロードマップを明らかにしていきます。

Q 委員会の特長／魅力は？

情報システム委員会の特長は、業種や業界を超えた多様なメンバーが集まりながら、高い一体感を持って活動している点にあると感じています。各社で採用しているシステムや運用は様々ですが、成功事例だけでなく失敗事例も含めて共有することで、委員会全体としての知見を高めています。

また、小委員会活動に加え、懇親会や合宿といった場を通じて本音で議論できる関係性が築かれており、こうした率直な意見交換が、AI活用を含む新しい取り組みを検討するうえでも大きな力になっています。さらに、特許庁との意見交換など委員会外との接点も多く、視野を広げる機会が得られる点も魅力の一つです。

Q 委員会としてのこだわりは？

委員の皆さんが貴重な時間を割いて参加しているからこそ、活動の成果を論説や発表といった形で残し、会員企業や知財業界に還元することを重視しています。特に、AIによるIPMS等の進化が知財業務にもたらす価値や課題について、実務に即した形で整理し、共有していきたいと考えています。

また、「楽しく参加・活動する」ことを活動方針として掲げ、積極的な発言や役割分担を促しつつ、特定のメンバーに委員会運営の負荷が集中しない運営を心がけています。委員会が、実務に役立つ学びと交流の場であり続けるよう、継続的に工夫していきたいと考えています。